

Sagar Dugani, Jeffrey E. Alfonsi, Anne M. R. Agur, Arthur F. Dalley (編)
前田恵理子 (監訳)

診断力が高まる 解剖×画像所見×身体診察マスターブック

皿谷 健

杏林大学・呼吸器内科学

本書の書評を前田恵理子先生から依頼された際に、軽い気持ちでお受けしたのだが、初めて手にしたとき、その本の中身の濃さと重量感(408ページ!)がどっしりと伝わってきた。いつも多施設が集まる症例検討会では放射線科医としてキレッキレの読影をされる前田先生らが総力を挙げて翻訳された本である。本書は臨床での統合的アプローチ、胸部、腹部、骨盤部、背部、上肢と下肢、頭頸部の合計7つの章に分かれ、各章では解剖学、診察(身体所見)、検査所見、画像所見、検査前確率を予測するスコアリング、特殊検査まで網羅しており他書に類をみない。各章では実際の症例が提示されどのように多角的に評価すべきかを、定義、疫学、原因、鑑別診断の基本事項に加え、症状、身体所見、検査所見まで含めて解説されている。

例えば強直性脊椎炎の症例では、典型的な靱帯骨棘形成での特殊検査として変形 Schober 試験(p 226)や HLA-B27 の測定まで記載され、疾患を丸ごととらえようとする意気

込みが感じられる本である。特筆すべきは、Clinical Pearl が随所にちりばめられており、その内容は患者のマネジメント、診断、検査結果の解釈にまで及ぶ。例えば、「大腸内視鏡検査は憩室炎の急性期には穿孔のリスクがあるため禁忌である。炎症性腸疾患や悪性腫瘍を除外するため、6週間が経過したあとに行うべきである」という短文で“ずばっと”迫ってくるものや、心嚢液貯留患者の心タンポナーデ移行のリスク評価における奇脈の重要性、その所見の取り方の記載がある。一方、ユニークな切り口のパールも多々あり、例えば、消化管悪性腫瘍の身体診察において人名に由来する5つの医学的徴候が挙げられている(下記)。

1. 左鎖骨上リンパ節(Virchow node)の触知
2. 左腋窩リンパ節(Irish node)の触知
3. 臍に突出する播種結節(Sister Mary Joseph node)
4. 直腸診で腫瘤を触知する場合、Douglas 窩への播種が示唆さ

れる(Blumer shelf)

5. 卵巣転移(Krukenberg 腫瘍)

呼吸器が専門の私にとって、診断スコアは初めて目にするものも多かった。例えば急性膵炎のベッドサイドのリスク分類 BISAP (p 114)、アルコール性肝炎の患者における副腎皮質ステロイドによる治療効果の予測(p 122)、C型肝炎、HIV、慢性アルコール性肝障害のある入院患者の肝硬変の予測に使用する AST to platelet ratio index (APRI) (p 125) など、実践的な内容となっている。

本書はこれから臨床経験を積む学生、研修医、若手医師のみならず、専門医として各科で活躍中のベテラン医師まで、再度多角的に病態をとらえ、患者を効率よく診断し、マネジメントするために有用な必読書となるだろう。

●B5/頁 408/2018 年

定価: 本体 5,800 円+税

[ISBN978-4-260-03627-6]

医学書院 刊